

ひと意見

大竹 道茂

伝統野菜は、その背後にあるストーリーが非常に個性的です。現在、野菜50品目と野菜以外の7品目が登録されている江戸東京野菜はいずれも、興味深い逸話を持っています。

41番目の野菜として登録されている「早稲田ミヨウガ」の復活は、わずか10年前のこと



江戸東京・伝統野菜研究会代表

とです。江戸の記録では享保20（1735）年の「続江戸砂子温故名跡志」にある他、11代将軍・家斉の献立にのぼり、黒船来航で有名なペリー提督に供された懐石料理にも使われたという、立派な逸話を持つているにもかかわらず、消滅の危機にひんしていたのです。

ただきました。早稲田大学生をはじめとする捜索隊を結成し、3回の捜索で三十数カ所にてミヨウガを発見。明治26（1893）年から続く旧家の庭に生えていたものを譲り受け、栽培2年目に同定に至

りました。現在は、捜索に参加した篤農家を含む8人が生産を担っています。地元新宿区の小・中学校でも、教育の一環として栽培が続けられています。

かつて、種が江戸土産として人気を博し、多くの地域に広がったことを思うと、ずいぶんな衰退ぶりです。しかし、今では地元での消費も活発になっていきます。早稲田ミヨウガは商店会連合が主催する「早稲田かつおフェスタ」で力ツオの付け合わせとして提供されたり、同区内27校の給食に採用されたりしています。活動を続ける中で、生産を継続している農業者や市場関係者だけでなく、飲食店や教育機関、一般消費者など、多くの人に支えられて伝統野菜が存続していることを実感します。伝統野菜を次世代になく取り組みは、市民運動となっているのです。

市民運動に発展 伝統野菜の普及

強い関心を持ってくれている若者がいることを、心強く思うばかりです。

イベント、学校給食 地元での消費活発に

早稲田ミヨウガの捜索には、故・梶井功東京農工大学元学長や堀口健治早稲田大学副総長（当時）に力添えをい